

# バルザック評伝

## 第一部

### 若き日のバルザック (3)

金子 守

- 第一章 バルザックの少年時代  
—— (本論集, 第11巻第3号)
- 第二章 屋根裏部屋のバルザック  
—— (本論集, 第13巻第3号)
- 第三章 バルザックとベルニー夫人  
—— (本号に掲載)
- 第四章 机上の実業家バルザック
- 第五章 バルザックと『ふくろう党』
- 第六章 バルザックと七月革命
- 第七章 バルザックとカストリー公爵夫人
- 第八章 バルザックとハンスカ伯爵夫人

### 第三章 バルザックとベルニー夫人

バルザックは1821年ヴィルパリジの実家に帰省していたが、その家はオルヴィリエ伯爵邸と向かいあった村外れにあった。そして、われわれがこの章で彼との関係を問題にしようとしているベルニー夫人は、バルザック家とは正反対の位置にある白亜の美しい館に住んでいた。このベルニー家は11世紀まで祖先の系図をたどることのできるピエモン<sup>1</sup>の由緒ある貴族である。バルザックはこの家のひとびとを知り、日ならずして彼は夫人と特別な関係を持つようになるけれども、夫人は43歳になっており、9人の子持ちであった。

ロール・ド・ベルニー夫人は1777年5月24日に、ハーピストの宮廷音楽師でドイツ人のフィリップ・ヨゼフ・ヒンネルを父とし、マリー・アントワネット王妃の侍女であるルイズ・ケルペ・ド・ラポルドを母とするふたりのあいだでヴェルサーユに生れた。

ロールのサン・ルイ教会での洗礼式には国王や王妃も臨席し、リシュリュ公、フィッツ・ジェームス公爵などの廷臣たちが列席していたという。というのは母がマリー・アントワネット王妃の寵愛を受けていたからであり、その娘ロールは光栄にもルイズ・アントワネットという洗礼名を頂戴したのである。しかし、間もなくその光栄は彼女を激動の渦にまきこむことになる。物心ついたロールは、不幸なことに1784年に父ヒンネルを亡くし、10歳の時には、すなわち、1787年には姓が変わる。母がイタリア軍団の副官であるフランソワ・オーギュスタン・レニエ・ド・シャルジエーと再婚したからである。

その3年後、かの大革命が起こる。国王と王妃は監禁され、1793年1月21日に遂にギロチンの露と消えたが、彼女の義父シャルジエーは王党派に組して同志と計り、幽閉中のルイ16世とマリー・アントワネット王妃を救出しようとして失敗し、運命を予感した王の密使となり、外国に亡命していたド・プロヴァンス伯（後のルイ18世）に王の遺髪と伝言を伝える役を果たしたという。一方、

ジャルジエー夫人は王妃から遺髪と金の耳飾りを頂戴していた。夫人は夫ジャルジエーの王党運動を助けた容疑から恐怖時代に2回も投獄される憂き目をみたが、最初はリヴリーで逮捕され、マドロネットに投獄された。けれども6週間後に娘の結婚式が近づいていたせいか不意に釈放された。しかしながら、1794年、ジャルジエー夫人は今度は家族ともども再投獄されたが、この時期、娘ロールはすでに結婚していた。

ロールはガブリエル・ド・ベルニー氏と1793年4月8日にリヴリーで結婚式を挙げる。ときに新郎のベルニー氏は24歳と4か月、新婦は15歳と10か月であったという。しかし、若いふたりが1か年と暮らさないうちに、ロールの夫や義父、それに彼女の母ばかりか、彼女自身も逮捕され、牢獄で暮らす身となり、ロベスピエールの失脚後、9か月がすぎたからやっと釈放された。

バルザックはわれわれが知っているように1821年にベルニー夫人を知るようになるのだが、当時、彼女の夫ガブリエルは54歳になっており、病気のためかほとんど眼が見えず、秘書として、完全に彼の文字を模倣することのできるヴィルパリジの若者をかねてから捜していた。そこで、バルザックがベルニー家へ出入りする動機となったのはそうした事情とされているが、また、一方では、彼がベルニー夫人の子供と遊び仲間であったことから、ベルニー家へ自然に出入りしたのであろうと臆測する研究者もいないわけではない。

前者の事情から、バルザックがベルニー家のひとびとと面識を持ったと推測する場合、彼の自伝的小説『谷間の百合』からの示唆があるようにわれわれには思える。

実は、バルザックの父とベルニー氏はかつて同僚の間柄であった。両人は陸軍経理部に席をおいていたし、両人の家はその頃ともにパリのポルトフォアン街にあったから、おたがいに面識はあったと考えられるが、どうも深い交際はなかったらしい。

ベルニー氏は1815年にパリから20軒の距離にあり、当時、人口も数千人と推測されるこのヴィルパリジに移住していた。それから4年後にバルザックの一

家がここへ移住してきて、昔のよしみから交際が始まったのが真相のようである。もっともベルニー夫人はバルザック家のひとびとにあまりいい感情を示さなかったと伝えられているが、その原因は相手が平民で自分が貴族だという誇りがあったことと、ベルナール・バルザックが偏屈者であり、その妻が高慢でよく喋る人柄のせいであるらしい。

さてわれわれが問題にしているベルニー夫人とはどんな女性だったのであろうか、夫人は堅実な性格で、自由闊達な精神の持主であったと伝えられ、現存している肖像から判断すると、卵形の顔立ちで胸もと豊かな美人であるが、反対に夫人がドイツ系であったせいか、本心のよく分からない女という評判もあったようである。一方、夫のガブリエルは、これは明らかに『谷間の百合』のモルソフからの連想もあろうと思えるのだが、理不尽で気の短い怒りっぽい性格であったとされ、そのためかベルニー夫妻はあまり円満な夫婦仲ではなかったと噂された。

ベルニー夫人はバルザックを愛人とする前にふたりの愛人をすでに持ったが、最初の愛人はカンピと呼ばれたコルシカ人で、夫がモンペリエに駐在する第九旅団に赴任していた留守中の情事で、彼女は幸福を夢みたものの、現実には不幸な結果に終始し、カンピとのあいだに不義の娘さえあった。この少女は成長するにつれて美貌の持主となり、母のベルニー夫人は1824年頃、この不義の娘ジュリーとバルザックを結婚させようとしたが、実現しなかった。バルザックにとってもこの話は満更でもなかったのか、後年、ジュリーを主題にした詩を発表しているほどであるが、バルザックが文壇で功なりとげた1844年に、昔日の面影すらないうらぶれた彼女と再会する。ジュリーは世間に美貌が通じなくなった自分を悟ったものか、詩人として身を立てようと考え、バルザックに詩を見てもらい、あわよくば出版社に売りこんで貰いたかったのであろうが、話にもならない駄作だったという。

夫人はその名をマニュエルという2人目の愛人をヴィルパリジでつくり、バルザックが夫人を親しく知ったときも、両人の関係は続いており、夫人自身が

マニエルの件を彼に告白している。

ところで、バルザックがベルニー夫人の名を初めて記述したのは、1821年6月9日という日付のある妹ロール宛の手紙である。多分、なにか関心を覚えたのであろう。

（一昨日はヴィルパリジの祭日であった。ベルニー夫人とお嬢さん達は白い服を着て……祭に来ていた。）（K）

われわれ読者は『谷間の百合』の冒頭で、主人公であるフェリックスが、やはりある種の祭りと言ってもよい舞踏会の最中にモルソォ伯爵夫人と劇的な邂逅をする場面を読んでいる。バルザックは妹ロールにはさすがに告白しなかったが、ベルニー夫人の肖像が示す如く彼女の豊かな胸をみつめて、青春の血がさわぐのをフェリックスと同じく感じたことであろう。ときは夏の始まりであった。

この年、すなわち、1821年にバルザック家にひとつの出来事があった。兄の友人、ル・プワトヴァンとの結婚を両親に反対されたバルザック家の2番目の娘ローランスに縁談がおきていた。相手はパリ入市税納所勤務のミッシュォ・ド・サンピエール・ド・モンゼイグルという30歳になる人物だったが、彼の亡父もバルザックの父とかつて同僚であったから、その筋のひとからの縁談だったのであろう。その姓名が語るようにド・モンゼイグル家は貴族であり、名門でもあったし、当人はなかなかの趣味人で品行方正ということでもあったので、バルザック家のひとびとはこぞって賛成した。バルザックも7月に妹ロール宛の手紙で次の如く述べている。

（彼はシュルヴィルよりも脊が高く、美男子でも醜男でもなく前歯が何本か缺けているが、夫として先づ申分ない人物だろう。）（W）

両人の結婚式は9月にあげられたが、彼女の結婚は皆の祝福を受け幸せな生活が送られると誰もが予想したのに実際はそうではなかった。1821年11月23日にバルザックはロール宛にローランス夫婦の生活ぶりを伝えている。

（ローランスの家庭はうまく行かぬらしい。モンゼイグルは万と名のつく借

金を有っているくせに、負債はないと思いついでいるような男で、全く言語道断だ。ローランスは債鬼の襲撃で弱りきっている。ある日、ローランスが涙を流して僕にそのことを打明けた時、若し僕が万と名のつく金めのものを持っていたなら、それをすぐ売って金に換え、ローランスにやれたらうに、とさえ思った。それに一番いけないことは、モンゼイグルは強情で——第一級の強情屋であることだ。彼は家政のことを妻に任せようとはせずに、針や皿まで自分で買物する始末で、それに度外れな自尊心をもっているときている。) (W)

バルザックのこうした非難はわれわれを苦笑させる。数年たてば、彼はこのモンゼイグルとそっくり同類になるからである。それで、翌年、バルザックはモンゼイグルを正真正銘の悪漢だと断言するようになる。ともかく、ローランスは不幸な生活を送ったらしい。

ところで、バルザック家のひとびとが交際を復活したベルニー家のひとびとが住んでいる土地家屋はもとはモンゼイグル家の所有だった。この事実はローランスが嫁ぐ以前にモンゼイグル家が斜陽の道をたどった証しだったのかも知れない。1822年になると、バルザックは明らかにベルニー夫人を意識しだしている。2月には夫人についてかなり長文の手紙を妹ロールに書き送る。その文面にはベルニー夫人の人間像が語られていて、ある種の驚きのニュアンスがこめられているのが読みとれる。

(私はあんたに話しましょう……ベルニー夫人はカラス麦、ふすま、小麦、稈を取引する商人となりました。夫人は40年の反省後、金銭がすべてであると気がついたからです。) (K)

こうした夫人像は、モルソフ伯爵夫人に確かにその面影を伝えていよう。さらにこの手紙には、ベルニー夫人と子供たちとの日常の様子が語られているが、バルザックがどちらかという子供に冷淡な自己の母を念頭に浮かべながらこの手紙を書いているのが推測されるのである。兄オノレは妹ロールに告げる。ベルニー家の子供たちは、自然に微笑しながら母に話し、母である夫人も子供たちに対してたいへん親切であると羨ましそうに語っている。

すでに前年にも、われわれが先に引用した手紙に読めた如く、バルザックは幾度か夫人に逢っていた形跡があるが、1822年になると、夫人に逢いたい願望からベルニー家を訪問するようになる。

バルザックはその頃『クロチルド・ド・リュズイニャン』を書きあげ、パリのユベール書店と出版の契約を結んでいたが、契約上の争いから上京することがあった。それは年が明けて間もない冬のことで、ベルニー夫人は冬のあいだパリで暮らす習慣があったから、バルザックはベルニー家の事情をよく承知していたので、夫人の激励を期待してか、ポルトフォアン街に滞在している彼女を訪ねている。彼は自己の母親からは望めそうもない優しい言葉を夫人から聴く。それはさぞかしバルザックの耳に心地よく響いたことであろう。いったい、どんな言葉を使って夫人は彼を励ましたのであろう。

アンドレ・ビリーは兩人の関係について、ベルニー夫人の方から若いバルザックを積極的に誘惑したとみなし、その理由として、夫人が次の如き彼の気を惹くような上手を言ったと判断している。

（貴男は家畜の糞がまじったわらに生えた花であり、ガチョウの群からかえた鷺の卵です。）（K）

日本流に言うなら、はきだめにまい降りた鶴とか、鳶が鷹を生んだということになろうか。

バルザックはパリに逗留する夫人に未練を残したまま、ヴィルパリジに帰ったが、早速、机に坐り、情熱あふれる手紙を夫人宛に書く。この手紙は1822年3月のある日、投函されたものとされている。

（あなたが不幸だということは存じあげております。でもあなたは魂のうちにあなた自身御存じないけれども、あなたを人生になお結びつけておくことのできる豊かさをお持ちです。

あなたが私の前にあらわれた時、その心に不幸の種を持つひとびとみんなを取りまいて、そういった魅力がございましたし、私は前から、悩めるひとびとが好きなのです。だから、私にとってはあなたの憂愁はひとつの風情、あ

あなたの不幸はひとつの魅力でしたし、あなたがあなたの才気のひらめきをお見せになってからは、私の思考のすべては知らず知らずあなたにまつわる優しい思い出に結ばれてしまうのです。

お別れして以来、手紙を差し上げようか、差し上げまいか、そればかりが私の心のたどった歴史、私の想念の向かうところでありました。そして、久しき前から、あなたをまともにみつめることもできないと申し上げたら驚かれるでしょう。普通ならば生意気な気持ちで一杯の若者の心が、希望という財宝をみがくよりもむしろ、ひとつの情熱を保ち養うことができるということに。けれど私はそんな風であり、いつまでもそんな風でしょう。極端なまでに臆病で、目がくらむほど愛情深く、「愛しています」と口にも出せぬほど初心なのです。そういった初心さや恥じらいに、拒絶がもたらすかも知れない怖れや恥ずかしさが加わります。ですから、これまで敢えて身をさらすことはなかったので、そんな目にあわずにすみません。今日初めて、私の心にあることを描こうかと思っております。そうです、勇を鼓舞しては見ますが、この手紙のもたらす結果をあれこれ考えてみるよう、私の理性がとっておいた最後のかくれ場にもぐり込まずにはられません。……いずれにせよ、私はあなたのことを考え続けるという、無上の楽しみに飽きることはありません。思ってもみて下さい。あなたから遠く離れて、その魂がすばらしい特権によって、距離を超越し、空中に理想の道を取り、陶醉してあなたのまわりを絶間なく駆けめぐり、あなたの感情生活に立会うのを楽しみ、不平を言う時もあれば、祝福する時もあるけれど、若い時にしか花咲かぬ熱い感情、率直な愛情でもってあなたを愛しているひとりの人間がおります。彼にとってあなたは恋人以上、姉妹以上、殆ど母のようなものです。いやそういったものすべて以上に、あなたは私にとってある種の神性であり、私の行動のすべてはそれに帰するのです。実際、私が偉大さと栄光を夢みているのは、あなたへと導いてくれるきざしをつくるため、何か重要なことを始めるのは、あなたの名においてなのです。あなたは意識なさらないでしょうが、私にとって本当の守り神なのです。ともあれ、人

問の心に宿る優しいもの、愛らしいもの、魅力あるもの、開かれたものすべてを御想像下さい。あなたのことを思うとき、それらが私の心の中にあると思っております。あなたはおそらく御返事を下さらないばかりか、この沈黙の敬意を、純粹で無欲な崇拜を笑い、軽蔑なさるでしょう。ならば私は、自分の感情自体で生きるにとどめましょう。私は少なくとも一通の手紙があなたへの道をたどっていると思って、僅かのあいだ夢をはぐくむことができたことになり、それが届かなければ私の悩みはそれなりの理由があったことになりましょう。これまで、私は自分で自分の喜びや悲しみを作り上げてきました。今や、あなたがその源です。何が起ころうとも、私はあなたを愛し続けます。初めての感情と官能にしかない率直さ、あどけなさを持ってそう申し上げます。) (K)

バルザックのこの手紙に読まれる妙に内気な愛の告白は、ベルニー夫人にとって気分の悪かりうはずはなかったであろうと推測されるが、両人の関係の全体から判断すると、夫人はこの手紙を受けとったとき、なぜか本心を偽った返事を書いたようである。否、あるいは彼の初心な恋心をいっそう刺激するために、彼女の故意の術策だったのかも知れない。しかしながら、筆者も男性族であるから、40歳代の爛熟した女の真意となると、容易に把握しにくいのは当然であり、それかあらぬか、日本には昔から7人の子をなすとも、我が妻には油断するなという夫に対する戒すらある。7人の子持ちの女はまさに40歳ということになる。もっともベルニー夫人は7人どころか9人の子供があった。否、不義の娘ジュリーまで数える10人もいたが。

ともあれ、青二才のバルザックの告白に読まれるものは、多分、円熟した女に訴えるにしてはまるで感覚的なりずきが伝わらない文章ではないのではないのかとも思えるのである。当人のバルザックもこれに近い予感を覚えたともみえて、私の無欲な純粋性を笑い、軽蔑なさるでしょうと記しているくらいであるが、いずれにせよ、バルザックの手紙は初心な自分という言葉の繰返しがやたらに目につく代物で、そうしたセリフは世間知らずの若者の特権であるとしても、こう幾度も読まされては飽がくるというより、夫人に年齢の隔りを容赦な

く感じさせることになる。それでなくとも、スタンダールのジュリアンを愛してしまったレナール夫人は私がせめて10歳若かったらと呟くのである。そこで、ベルニー夫人は返事でバルザックが期待しているのとは反対に、つまり、彼を心から励ましたのではなく、むしろ彼を軽くからかったのが真相らしい。バルザックは夫人の返事に本気で怒り、われわれが以下に読めるような詰問調の手紙を彼女に書き送る。

（あなたが私になさるのは残酷な冗談ではないでしょうか、それにあなたの手紙はすでに大きな過失のにがい果実ではないのですか、何かの感情を刺激するため、あなたに憐みを求める不幸な人を茶化すにあたり、寛大な魂はどんな楽しみを覚えることができましょう。もし誰か不幸なひとが、何か慰めを求めているら。このような女性の邪悪さは私が他の女と同じような女とっていなかっただけあなたには大きな悪徳ではないのですか……ああ、もし私が女性だったら、45歳だったら、そして、まだ綺麗だったら、ああ、私はあなたとは異なった行動をとったでしょうに。）(K)

バルザックはこの文面に続けて、あれこれと夫人に自画像を描写してみせる。彼が心から願っているのは、夫人の愛人になることなのだが、それにもかかわらず、彼自身が告白している如く、愛人らしい調子も態度もとれないし、いわんやプレイボーイの積極さも持ちあわせていない。こんなに臆病な自分でも情熱という坩堝に一度火がともれば、なにもかも焼きつくす激しい魂が宿っていると夫人に告げるのを忘れていない。そして、バルザックはベルニー夫人にルソーの『告白』をよく読んで下さいと哀願しているけれども、その心は、私のためにヴァランス夫人の役をして下さいと言いたかったのである。こうした彼の心からの哀願に、今度は夫人も真心で返事をしたらしく、彼女は年齢を考えると、あなたのような若いひとから愛される資格がないと彼の愛の告白にさからったとみえる。そこで彼は夫人に、

（あなたの45歳という年齢は、私にとって存在しない、かりにあなたが45歳だと認めるとしても、私は45歳という年齢を私の情熱の強さの証拠とみなすで

しょう……真実、私があなたを愛していないのなら、私の目にあなたを滑稽にするはずのあなたの年齢は、普通では考えられない奇妙さとのコントラストからむしろ反対に私を結びつける絆、激しいものなのです。）(K)

このように、バルザックはベルニー夫人が心に構築している砦をひとつひとつ攻め落してゆく。さらに夫人が世間体をはばかって気にしているふりをした道徳についても、この世には美德も悪徳も天国も地獄も存在しないのですと夫人を説得している。当時、王政復古下の教会は、不貞女の地獄に落ちる様子をさもおそろしげに説教していた。ジュリアンの腕に抱かれたレナール夫人は地獄と官能の陶酔とのあいだをさまよってスタンダールは描写している。それゆえ、ベルニー夫人は3度目の地獄ゆきのキップを手に入れようとしていた。

（でもあなたがまたこう叫んでおられるのが聞こえるようです。「道徳、世間体、顔向けできなくなってしまわ。」

私は、その反対だとあなたに申し上げるのが恥ずかしい、なぜならあなたが自分でそれを証明できないと思うことになるからです。あなたが私を愛して下されば、もうそれは既成事実です。結局のところ、理性によって身を取り繕うばかり。あなたは哲学的原則を持ってみえますか、それとも、持ってみえないのですか。

私が推察しております如く、それを持ってみえますならば、結局、皆死ぬのだから、美德も悪徳もない、地獄も極楽もない、われわれを導く唯一の指針は、次の自明の理ということになります。出来る限りの快樂を手に入れるべしと。）(K)

ベルニー夫人は一寸した心づくしにもうすぐその気になり、愛の証しをねだる彼の執拗さに嫌気がさしたのか、最後通告じみた手紙を送った。あなたは私を心から愛していると告白なさるけれども、本当は私を愛してはいないのでと厳しく彼の愛を拒絶した内容の手紙だったのである。バルザックはこうした文面に仰天し、

（私はあなたの手紙の意味が分かると思う。最後通告なのですね。さよなら、

私は絶望しております。タンタールの苦悩以上に追放の苦悩をより私は愛します。なにも苦しんでおられないあなたにとっては、私がどうなろうとどうでもよいのだと思います。私が一度もあなたを愛したことがなかったと信ずることがおできになるなんて！ さよなら。)(K)

このような売り言葉に買い言葉といった絶交状のやりとりにもかかわらず、兩人の文通はそれでも辛うじて続けられていたらしい。バルザックは夫人のすげない態度に一時はひるんだとしても、相変らず夫人に手紙を送り続けることだけは止めなかったとみえる。

あなたを愛していますという言葉は、それがどんな手段を使用してであり、続けて受け取ることは女の心に、否、男でもそうだが、不思議な作用をするものであり、われわれはスタンダールのジュリアンが愛の片鱗すらも感じていないフェルバック元帥夫人に恋の手紙を届け続ける場面を読んでいる。元帥夫人は最初のうちはジュリアンの手紙をたいして心にとめて読んでいる様子もなかったのに、やがて彼の手紙を待つようになり、いつしかジュリアンを心から愛するようになってしまふ。ベルニー夫人の心境も元帥夫人のそれと大差あるまい。しかも、バルザックはジュリアンの偽りの愛とは異なり、真実の愛で語りかけているのだから、今度は夫人が彼の誠実な愛にこたえる番である。それで、夫人は彼を愛せない決定的な理由を告白する。つまり、遂に夫人はある男、夫以外のある男を現在愛していると正直に白状した。

(あなたは御自分が若くて誰も愛していないなら、私を愛するでしょうとおっしゃった。こうした返事で満足する者もたくさんおきましょう。でもこの私にはあなたのことばかりを考える淋しさを強いたのです。……けれども、もしあなたが御自由になられたら、考えて下さい。私のことを考えて下さいね！しかし、どうしたら私はあなたに気にいられると夢みることができましようか。私はガラントリーと呼ばれる軽薄なテクニックを知りません。)(K)

続いて、バルザックがベルニー夫人に出した手紙にわれわれが読めるものはこうした一途な哀願である。さよならと、それもアデュを使用して、すなわち、

永遠にさよならと幾度か綴りながらも諦めきれない切ない恋が告白されている。それにしても、夫人はたとえ相手がバルザックでなかったとしても、青年の純粋で誠実な愛を拒否できる女だったろうか。バルザックに愛を告白されたとき、夫人はもう45歳になっていたし、一方のバルザックは年齢のわりには世間知らずであったから、そうした彼を知った夫人は母性本能をくすぐられもしよう。それに夫人自身が誰かを愛するとなると、それが人生の最後のものとなる予感が働いたはずである。夫人のような愛に溺れた者は溺れ続ける宿命に捉えられている者ではないのか、もしそうでない道があるとすれば、フロベールのボヴァリー夫人が選択した自殺しかそういう女の安息はないと言えるのであろうか。

アンドレ・ビリーも『バルザックの生涯』で、後年、バルザック自身がベルニー夫人との恋愛を回想してか、ある小説のなかで次の如く述懐していると指摘している。

（男の初恋をみたまものは、女の最後の恋だけである。）

しかし、われわれはもう一度二人の愛の性質をたしかめたいと思う。なるほど、バルザックは30歳代の女性たちを小説に登場させ、彼の読者である30歳代の女性たちを満足させたかも知れないが、作家である彼自身は実母からは得られなかった愛を他の女性に求める性向があった。それがベルニー夫人であり、彼女はバルザックのそうした心の深層に巣くうものを直観していたのではなかったかと思われる。そこに女の本能から始まる愛がある。ある研究者は二人の恋愛について、バルザックが45歳にもなる姥桜のベルニー夫人を恋人として選んだのは、偶然であるともなして、彼の周囲に若い娘たちがいなかったせいであるとしている。バルザックがそうした環境で生活し、女性たちと親しく交際できなかったことがそうさせたともみているが、われわれはこうした見解は上述の理由からとりかねるのである。

ところで、バルザックがおお！ロールという呼びかけで起筆した手紙が以下の二人の逢引をわれわれに明らかにしている。

ある夜、両人はベルニー館の庭園で初の逢引をひそかに体験することになった。

すでに夕陽がすっかり沈んであたりが暗がりとなった時刻に、バルザックはまだ一時間も前から、約束の裏門で心臓の高鳴りを意識しながら、夫人がでて来るのをじっと待っていた。じりじりする気持ちを抑えかねて、その辺を行ったり来たりしていた。

やがて、裏門でひとの動く気配が感じられた。

「そこにいるのは、オノレ、あなたなの。」と夫人は闇のなかで彼を認めて、低い声で囁いた。

「そうです、僕です、奥さん。」とやはり低い声がした。

しばらくすると、どちらからともなくふたりは小さな榆の茂った細道を歩き始めていた。やがてのこと、夫人の方からベンチに坐り、ながい接吻をかわした。

どれだけの時間がたったのであろうか、先にベルニー夫人が姿をその場から消した。

一方、彼は愛する女の姿が闇にすっかりとけこんでしまったとき、夜の村を横切ってわが家に帰った。

即刻、バルザックは夫人宛の手紙を書き始めたものの、貴女の熱狂的な接吻の追想にかられて、何も書くことが浮んでこないと零している。

（……そうです、私の魂はあなたの魂にすっかり結びついてしまっております。それで、今後、あなたは私と共に歩かれるでしょう。おお！ 私は優しく魅惑的な不思議な力を取り囲まれております。私にはベンチしか見えません。あなたの優しい感触のみを感じているのでございます。眼前に咲いている花がたとえすっかり凋んでしまってもなおひとを酔わせる薫りを保っている。あなたは恐怖を示されます。私の心を引きさくような調子でそうした恐怖を表明されます。ああ！ いま私は自分が判断することに確信を持っております。と申しますのも、あなたの接吻は何もかえることはなかったのでございます。

おお！ もし私がかわったとするなら、狂気じみてあなたを愛していることで  
す！）（K）

われわれがこの手紙を読むと、ベルニー夫人はバルザックに愛を誓いながらも、ふたりの年齢の差をひどく気にしたらしいことが分かる。すなわち、夫人が心から彼を愛するようになったことの証しを読みとれるのである。だが、初心なバルザックはベルニー夫人がなぜこれほど年齢のことを気にするのか、多分、理解できなかったのではあるまいか、夫人が歳のことを口にする度に、彼は本心からまごついていたと思われる。女を幾人も知った男からみればもの好きにとからかわれることなど彼の頭のどこにも浮んでいないのである。いわんや、小娘など小便臭くてと思っていたのでもない。要するに生涯で初めて女から愛されてただ無邪気に有頂点になっていたのである。

この逢引から4か月がすぎた10月4日に、バルザックは夫人に手紙を出しているが、文面の冒頭にも最後にも、あなたとの初めての接吻を思いだすと、今でも心は震えると述べている。

（僕達の仲が進むにつれて、僕はあなたの中にたくさんの美しい感情を発見している。最初はそれとわからなかった偉大なものに充ちているのは、真に美しいものの特性だ。ロール、白状すれば、あのベンチの聖変化、息も絶えたかと思っていた愛の祭典が、……おおロール、今こそ本物の情熱の燃える証しを受けてくれ、そう、僕の生涯の残りを通して、誰もこれほど素直でこれほど壮麗な楽しみを僕に与えてはくれないだろう。あのひそやかな讃辞が僕の心のすべての思いを沸き立たせた。あなたは僕にとって、もう何ものでもなくなってしまうとか、これほど愛しても息子としての感情しかわけてもらえないだろうとか、そんなことはありません。ロール、あなたは僕の考えることすべてのうちに存在するだろうし、僕が他の人間達より上に出られるようなことをするのは、皆あなたの名に於いてなのです。僕はもう愛しいあなたの名以外のモットーはいらないし、あなたの捧げてくれる尊敬に価するように、やり抜こうという意欲が沸いてくるのを感じている。僕はあなたのその気持ちを誇りに思

うし、十字軍兵士達が白兵戦に「神が希み給う」と叫んだとすれば、僕がなんらかの栄光を手に入れられるような仕事の只中にあると思うときにはいつも、僕の叫びは「ロールが望むから」だろう。……僕はあなたに、魂の、心からなる接吻を送ります。その接吻は、思想の領域に踏み込ませた積り。ロール、あのベンチで最初の接吻の日よりも更にあなたを愛しています。そして、表面は落ち着いていても、心は同じ位にふるえています。) (T.S)

幾度かの逢引がかきなり、当人たちが周囲のひとびとにどんなに悟られまいと用心していたとしても、ヴィルパリジの村の噂にならないはずはなかったであろう。バルザックがベルニー夫人に手紙でうちあけた文面を読んでも、そうした噂を本人たちもよく知っていたようである。

(若い娘たちの刺すような眼差しは、私たちのことを見抜いていると思わざるをえないのです。特にあなたの娘エマニュエルは私にもよく分からないのですが、私と顔をあわせると彼女はきまって赤くなるのです。それで私がお宅へよくゆくのは彼女に私が求愛しているという噂がたっているのです。) (K)

バルザックの母も、息子オノレと夫人との関係を見抜き、娘ロールの嫁ぎ先であるシュルヴィル家に息子を病気の治療という口実でしばらく行かせることにした。もっとも、それは口実ばかりではなく、実はバルザックはすでに神経痛をわずらっていた。

彼は夫人との恋愛にあけくれた時期、『クロチルド・ド・リュズイニャン』をすでに執筆していた。妹ロールの住むベエイウに隔離されることになった際、彼は郷土史でもあるシャルル四世の乱行とか、アンブワーズの陰謀などを執筆する予定をたてていた。勿論、これらの歴史小説の題名からも、スコット小説の影響が考えられるが、ロワール河流域には歴史小説の材料を豊かに提供する幾つかのルネッサンス期の城が点在している。なにしろ、バルザックはツールで生れたのである。そして、それらの城を見ながら育ったのである。

1820年代のフランス文学界は、浪漫主義の開花期をようやく迎えようとしていた。当時の読者は、シャトーブリアンの『ルネ』やミュッセの『世紀児』な

どを歓迎していたが、バルザックは憂愁をたたえた主人公を創作しようとは思わなかったらしい。

それどころか、バルザックは初期浪漫主義には反対であった。彼はル・プロトヴァンと疎遠になった1823年の冬にオーラス・レッソンと知りあいになっていたが、年があけた1月、2月としばしば彼に会っている。その2月にバルザックはレッソンから文学雑誌『フューユトン』に紹介され、寄稿するようになった。この雑誌は自由派で反浪漫派であったというが、フランスの知識人たちはスタール夫人の『ドイツ論』やシュレーゲルの『演劇文学講義』によってヨーロッパに興った浪漫主義を漠然と知り、古典主義と現代文学（すなわち、浪漫主義文学）という二大潮流があるらしいことを認識し始めていたのである。しかしながら、彼等は十分に浪漫主義の本質を認識していたとはいいがたい。そして、特にその現代的傾向を無視していたようである。

従って、1823年になってもフランスの大部分の文学者は、たとえば、スタンダールがミラノで経験したような浪漫主義の性格については殆ど無知に等しかったのである。しかし、フランス浪漫主義もイタリア浪漫主義と同じく政治と無関係ではありえなかった。つまり、文学上の教義である以上に政治的意見の表現であった。

ウィーン会議の結果、フランスはブルボン王朝が復活し、ルイ十八世を王として迎え、王政復古の時代となった。そして、七月革命の前夜まで、次のシャルル十世も大革命以前の王政を夢みて、議会の保守派と結び、反動政治を続けたのである。この期間、フランス知識階級は時の権力に対してどのような反応を示したのであろうか。彼等は帝政時代に大いに苦しみ、今はただ平穏な日常生活を心から願い、そうした生活が約束されれば、自由があると考えるに至ったのである。

従って、彼等は権力に従順であるばかりかむしろ積極的に協力してその恩恵にあずかろうとしていたのである。青年文学者の多くは帝政に対する反抗信念から、あるいは、敗戦によっておくれをとったフランスに残された遺産である

文学的優越を確信して、それぞれの信念と手段に応じて国家に協力する必要を感じとっていたのである。要するに熱戦は終結したけれどもその余蘊がくすぶっていた。殊に知的青年層に残り、外国に対して知識上の冷戦を続けて敗戦の意識からの脱却をはかったのである。

彼等はそのような信念のもとに文学を考えて自ら浪漫派を名のり、文学は時の社会の表現でなくてはならぬとする極端な法王党ボナル伯の言葉をモットーとするに至ったのである。その主義主張は、新しい社会的政治的秩序には新しい文学が必要である、従って、その文学は当然カトリック的であり、王政主義的であり、革命を導いたイデオロギーを排斥するものである、その扱う題材をフランスの歴史、殊にもっとも民衆に慕われた諸王の伝説の時代であり、もっとも純粋な信仰の時代である中世に取材して王室の悲哀と栄光を賛歌し、18世紀の物質主義に疲労し、信仰の平安を再び見出すことを願望する現代の悩める魂を救い、恋愛を信仰を諸王を歌うときにも常に神秘第一主義でなければならないというのであった。このように初期浪漫派作家たちはウルトラかそのシンパたちであった。

1823年にウルトラに絶好の反動的口実を与えるベリー公事件が起きた。この事件を機にますます反動的気運がたかまった。すなわち、出版の自由が制限され検閲が厳しくなり、大学が監視される事態を招いたのである。そして、教会の勢力下にある「良き文学の会」は《かつて文芸芸術に光輝あらしめた古き原理の下に文芸芸術を復せしむること》を欲するすべての王政主義信奉者を集める目的をもち、いろいろと策謀し成功する。すなわち、「良き文学の会」は一挙にユゴー、ラマルティエヌ、ヴィニー、ノディエなどの青年詩人、作家たちを獲得して会員としたのである。そして、彼等の作品が流行する。詩的恋の感傷、信仰の不安、そこはかとなきメロディを求める当時の趣味を読者に満足させるラマルティエヌの詩集『冥想詩集』や聖書と王党的感興よりなる貴族詩人ヴィニー、それに、将来一身に栄光を集めるユゴーのカトリックと王政主義的信念に燃える『オード』などであり、他国の作家ではウォルター・スコットが

フランス人の中世趣味に答えて流行し、バイロンもその絶望の哲学よりはむしろその東邦の幻、新しい形象の詩人として迎えられていた。こうした浪漫主義を若いバルザックはどの程度理解していたのだろうか、多分、反浪漫派の雑誌『フウエトン』に寄稿していたとはいえ、それほど主義信念にもとづくものではなかったであろう。それかあらぬか、1824年の冬にはこの雑誌との関係はなくなるのである。

ところで、バルザックは愛するベルニー夫人と引きはなされたにもかかわらず、シュルヴィル家に気晴しを土産とした。ともかく、どちらかと言えば彼は陽気な男だったのである。それに、妹ロールはシュルヴィルとの結婚にもかかわらず、兄バルザックとの肉身の絆を弱めることはなかった。あまりふたりが仲よくするものだから、シュルヴィルは嫉妬からか、やがてバルザックがロールに会いに来るのを邪魔だてするようになったと言われているほどである。いわば、彼はノルマンディに追放されたわけだが、そこに住むひとびと、彼等の日常生活、風習などを、作家的感性からつぶさに観察していたと伝えられ、さらに近くの有名なシエルブール軍港へ見学に行ったりしていた。

パリで『クロチルド』が出版された際、なぜか彼は上京せず、出版をみていなかったようであるが、作品の献辞は言うまでもなくベルニー夫人に捧げられていた。バルザックの母は、まだ、息子オノレに小説家としての技量を認めていなかったから、出版された『クロチルド』についても、たいへん厳しい批評を示して、読者はこの小説を読んでも面白みを感じないであろうと言い、彼女自身はそれどころか、嫌悪を感じる作品であるとみなしたばかりか、自己の批評をロール宛の手紙に書き込み、兄と仲のよいロールの口から自分の意図を息子オノレに伝えさせようと目論んでいたのである。

（私がオノレに指摘した欠点のすべては確かにその通りなのです。『クロチルド』を読んだひとびと誰もが、私が言った通りのことを言いました。それが非常に正当だと知ったことはどんなに辛いことでしょう。私はむしろ自分がまちがっていることをどんなにか願ったでしょう。オノレは私をととう納得させ

てしまっていたので、私はいたるところで讃辞を期待していました。それがまったくありません。あちこちでひとびとは私に同じ言葉を繰返します。あんたは私たちの判断が厳しすぎると言いたいのでしょう。私の友人たちはオノレが豊かな想像力を持っていることは認めております。けれども、彼等はオノレが彼自身に確実な判断力が欠如していることを認識しなければならないだろうことも認めております。……オノレはすべてを信じるか、何も信じないかのどちらかです。それで、私は頭が混乱しているのです。今あんたにこう書いている全部をオノレに告げるとなると、私は大いに怖れることになりましょう。ですから、私はオノレに抱いているあんたの優しさに期待しているのです。オノレをあまり落胆させることなく、彼にさまざまの観察をさせるのです。さらにあんたにはこの件と同じくらい大事な別の件もオノレに話して頂かねばなりません。オノレは知識に自惚れていますが、その自惚が自尊心をすっかり傷付けるのですね。それで、彼はときどき無分別よりも始末が悪くなり、年齢や才能やひとびとや条件にそむくこととなります。彼にその意志がなくとも、彼の判断の欠点、本人はそれと気がつくことなく、彼にこれらの誤謬をおかさせているのです。私がオノレのその何かに言及しようものなら、彼は立腹し、そのように眺めるのはこの私だけであると言い張ります。……ベルニー夫人はオノレにたいへん心を惹かれてみえて、先日も私にこう話してみえました。

「私は彼に愛着を感じておりますから、彼が言葉や態度に配慮するように大いに心がけましょう。」と。) (K)

バルザックの母が娘のロールに宛てたこの手紙が明らかにしているように、彼が小説家として身をたてることについては、ふたりを例外とすれば、バルザック家の者も、その知人たちもこぞって反対だった。それで、彼の味方になってくれたのは、ふたりのロールだけだった。すなわち、彼の妹ロール・シュルヴィルとロール・ベルニー夫人とである。

1822年の秋、バルザック家のひとびとは、彼等と親類の関係にあった家主との争いが原因でか、ようやく住みなれたはずのヴィルパリジの村を去り、再び

パリへ移ったのであるが、その直前にバルザックは古都プロワへの小旅行を試みていたようである。

この年、彼はオラース・ド・サントーヴァンと署名した『アルデーヌの助任司祭』を執筆し、出版しているけれども、妹ロールもこの小説の創作を手伝っていたらしい。というのは、この時期に彼が妹ロールに宛てた手紙に、この仕事の継続はあんたには辛くてできないことだろうか、一日に60頁もあんたが執筆することができるとは考えられないなどと読めるからである。さらにあんたが執筆する小説がどんなに駄作でも、売れる自信はあるから、小説のプランを送るので、出来るだけ早く完成して欲しいと虫のいい依頼をしている。そして、作品は早く完成すれば、それだけ早く売れると妹ロールに督促している。

われわれがすでにみたように1822年の7月に『クロチルド』が出版されたが、この年はバルザックが愛しているベルニー夫人の期待にこたえるためか、大いに創作にとりくんだ時期である。同年の11月には、『アルデーヌの助任司祭』に続いて、オラース・ド・サントーヴァンと署名して『百歳の人』が出版されている。これらの3作品はそれぞれタイプの異なった小説であり、ロマン・イストワール、ロマン・ヌワール、メロドラマといった具合である。バルザック当人は、後世言われている如く、あるいは位置づけられている如く、習作の目的でこれらの小説を執筆したわけではあるまい。彼の妹宛の手紙から推測できる通り、金になればという気持ちが本心であろう。しかし、そうした目的ではたいした作品になるはずはなかった。しかしながら、バルザックがこれらの異なったタイプの小説を創作することで、技術上では何かうるところがあったことは確かであろうと、われわれは推測したのであるが、実はモーリス・バルデッシュの研究によると、バルザック自身も満足することのできる創作上のまったく新しい技術を習得したとは言えないようである。

次にこれらの小説の梗概を述べながら、バルザックが創作上でいかなる技術を見せているのかを検討してみたいと思う。それには、彼がどのような先輩作家に手本を求めていたのかを研究することがわれわれの課題となるが、この解

答であるその誰かはやはりウォルター・スコットが筆頭にあげられるのである。すでに『ピラゲ』にスコット小説の影響とみられるコミック性での痕跡をわれわれも確認したところであるけれども、この共同創作においてもスコットの影響とみなされた部分は、バルザックが執筆しているように思えると、モーリス・バルデッシュは研究成果にもとづいて証言している。そこで、共同創作によらずにバルザックが単独で小説を、それもロマン・イストワールを創作するとなると、師と仰ぐのはウォルター・スコットであり、その事実はスコットの模倣が『クロチルド』にあっては『ピラゲの女相続人』よりいっそう顕著であることが認められるからである。前者の執筆時にバルザックがスコットから学んだものはロマン・イストワールの創作に必要なすべて、たとえば、主題と時代の選択、作中主人公と脇役、それに会話と描写といった諸点である。

さて、『クロチルド』はバルザック研究者たちが明らかにしているところによると、バルザックがスコットの『ケニルワース』とか、特に『アイヴァンホー』を読んだ時点で着想されたに相違ないと言われている。しかし、この小説はその内容からしてロマン・イストワールであると同時にロマン・クルトワでもある。

その梗概は、キプロスの王ジャンがヴェネチア人に追放され、娘のクロチルドと共にリュズイニャンの城にのがれたが、山賊のアンゲリ・ル・メクレアとイタリアの外交官で奸智にたけたミシェル・ランジュとが共謀し、ジャン王を捕えてヴェネチア人に引き渡そうとし、王がひそむ城を包囲する。かくて落城寸前、プロヴァンス伯ガストンが奇蹟的な救助を試みて王をあつく庇護する。それで、王は感謝の気持ちから娘クロチルドを伯に与える約束をするのだが、一方、クロチルドは城に逃げ込んで来た美男のユダヤ人ネフタリを熱烈に恋していたので、彼に事情をうちあけて自殺する決意であると告白する。ところが愛するネフタリこそプロヴァンス伯ガストンの変装であったことが判明する。

それゆえ、作品像は殆どスコットの『アイヴァンホー』そのものであり、バルザックの意図は明らかにスコット流のロマン・イストワールを執筆すること

にあったと考えられるが、この小説にスコット小説が持つ歴史的雰囲気をもりこむことについては成功したとは考えられない。その理由は、ロマン・ヌワールの定石的な筋の運びに相変らずとらわれていた事実が、スコット流の歴史的雰囲気を描写するのを邪魔だてているからである。たとえば、『アイヴァンホー』にみられるサクソン人とノルマン人の歴史描写に類似したものがバルザックの『クロチルド』にはない。小説の展開、粗筋はスコットのそれではなくて、メロドラマなり、ロマン・ヌワールのそれであるが、作中人物の一部にはかなりのスコットの影響がある。たとえば、クロチルドの保護者は明らかにアイヴァンホーを模倣している。けれども、バルザックは作中人物を作品のなかで生かす、つまり、十分に活用する技術となるとまだぎこちない。一方、スコットは脇役を小説のなかで十分に生かしている。そして、その効果は次の3点から作品像を豊かにしている。脇役たちを活躍させることで、その時代の風習、道徳などをわれわれ読者に説明しながら歴史的背景をもりあげる。第2点は彼等を通じて、具体的には彼等の会話で作中主人公を読者に告げる。その第3点は小説の展開における細部を補っている。バルザックはこのような3点からなるスコットの創作技術をまだ自分のものにしていないと言える。

次に2番目の小説『百歳の人』はイギリスの作家チャールズ・ロバート・マチュリンの『メルモス』を手本としている。1821年にマチュリンの『メルモス』が仏訳されてフランスで出版されたが、バルザックは『百歳の人』の創作に際して、そのすべてが剽窃と断言しても過言でないほど模倣してしまっている。メルモスの如く、バルザックの老ベランゲルトも悪魔と契約することで異常な力を所有している。メルモスとベランゲルトとの差は悪魔との契約条件に僅かにみられるのみである。

小説の梗概は、悪魔との契約という人間的犠牲の結果、永遠に生きる能力を授けられた老ベランゲルトが、姓名を誤認したことにより、このことが小説の伏線となっているけれども、帝政末期にベランゲルト家の子孫であるテュリュス將軍の許婚である娘を最後の生贄として選び、死者の住居なる死臭漂ようカ

タコンベの入口を塞いでいる石をこじあけて、まさに殺されんとしている彼女を危機一髪のところで救うというものである。

バルザックは創作に際して、『メルモス』の多くのエピソードをそのまま取り入れてしまっているばかりか、メルモスの持っている恐ろしい力を老ベランゲルトになんら躊躇することなくそっくり与えてしまっている。このような模倣からバルザックは小説の構成や物語のからみをマチュリンから学んでいるのであるが、しかしながら、『百歳の人』もその終章にロマン・ヌワールの伝統的な描写を持っている。たとえば、穴倉とか不法監禁とかが相変らず背景となっている。

バルザックは『メルモス』を読み、マチュリンを非常に高く評価し、数年後、彼こそグレート・ブリテンが誇ることができる最も独創的な作家とみなしたのである。そして、バルザックはマチュリンの『メルモス』をゲーテの『ファウスト』と比較できる傑作と考えたほどであった。

最後に3番目の『アルデーヌの助任司祭』は、帝国時代のメロドラマに属する作品であるが、実はこの小説も『メルモス』のエピソードのひとつにヒントを得ている。この小説の梗概は以下の如きである。ロザン侯爵夫人は新しく着任した助任司祭の容貌にかつての愛人の面影を認めて、懐しさのあまり、恋するようになる。ところが、助任司祭ジョゼフ・ド・サン・タンドレは、夫人の愛の告白を受け入れかねる懐しい追憶を持っている。彼は少年時代を実の妹と信じていたメラニーと共にマルチニック島で暮らした自然児で、ポールとヴィルジニーの如く、ふたりはたがいに愛しあいながら育ったのである。

彼が実の父と信じていたメラニーの父は、ふたりの子供に教育を本国フランスで受けさせるためふたりをつれて帰国することにしたのであるが、フランスへ向かう途中、彼等が乗った船のアルゴウという水夫が指揮して反乱をおこし、ジョゼフとメラニーは海に投げこまれてしまう。

ふたりは通りかかったデンマーク船に救助され、無事にパリに到着した。ジョゼフは本国で教育を受け、実の妹メラニーを愛することは、近親相姦の罪と

なることを知り、メラニーの愛を避けるために、彼は妻帯の許されていない僧侶となる決心をし、サン・タンドレ司教を訪ねる。ところが、この司教こそ、かつてのロザン侯爵夫人の愛人であり、兩人のなかにできたのがジョゼフであった。そこで、ジョゼフが妻の息子である事実を知ったロザン侯爵は彼を養子に迎えようとするが、ジョゼフはどこかへ立ち去ってしまう。その彼がやがてふたつの真実を知る日がくる。そのひとつは、サン・タンドレ司教が実の父であり、そのふたつは、それまで妹とばかり信じていたメラニーが、実は叔父の娘であるということである。こうした時期に、あの水夫のアルゴウがいまや銀行家の姿で現われ、メラニーを囮にして彼等を脅迫する。ジョゼフは障害を克服して彼女と結婚するが、すでにアルゴウの脅迫のためにすっかり衰弱していたメラニーは苦悩のあまり死ぬ。

この粗筋が示す如く、『アルデーヌの助任司祭』はメロドラマであるが、バルザックがこの小説を創作することで何を得ようとしていたのか、この問題の解答は作中人物の創造とか、恋の役割とかである。なぜなら、前の2作までは恋人たちは小説の展開の流れの外にあった。だが、第3作めの恋人たち、つまり、ジョゼフとメラニーとの愛を描写するとなると、バルザックはデル・リエスとステニとですでに経験済みである。この小説も『百歳の人』と同じくマチュリンの影響を指摘できることは言うまでもないが、ジョゼフとメラニーとが自然児として描写される設定はベルナル・ド・サン・ピエールの明らかなヒントなり影響なりを認めることができるし、作中人物の脇役に相変らずスコットの影響をわれわれは認めることができる。

以上が3つの小説の梗概と解説であるが、さらに少しばかり解説を加えると、バルザックの初期作品であるこれらの小説の女主人公は殆ど独創性のない紋切型であるが、それでもどこかベルニー夫人に似ている作中人物が登場している。たとえば、われわれはロザン侯爵夫人にベルニー夫人の面影を認めることができるという。このように、バルザックが30歳代の女性たちを小説に登場させて、彼の小説の特色を出していることは周知の事実であるが、バルザック

とベルニー夫人との愛が30歳代の女性の愛の姿を作家に提供しているとみなす見解は妥当な判断と言うべきであろう。

これらの習作とみなされた小説ばかりでなく、『ふくろう党』以後のバルザック小説の女性像にあって、『谷間の百合』のヒロインであるモルソフ伯爵夫人を筆頭にわれわれ読者に感銘を与える愛は人生体験を持つ女性のそれである。いわゆる生娘の愛、それが『あら皮』のポーリーヌにせよ、『ウジエヌ・グランデ』のウジエヌにせよ、主人公との愛は最初の出会いからながい時間を必要とするか、あるいは作家が彼女はいま彼を恋しているとわれわれ読者に注釈をする心理的時間を必要としている。そして、彼女たちが成長して始めてバルザックが愛を描写していることはわれわれの知るところである。こうした愛の形は、人間バルザックの人生における実体験によるものにほかならない。それゆえ、作家バルザックが創作において真実の愛を描写するとなると彼の人生体験でのそれが母胎とならざるをえない。

スタンダールを研究してきた私は彼が自己の小説の特色として、ふたりのヒロインを創造していると誇らしげに語るのを幾度か読んでいるのであるが、そのひとはバルザック小説のヒロイン同様に人生体験豊かな女性として創造され、いまひとは生娘として登場してくるが、彼女は人生の羈旅を体験せず主人公と激しい恋をする女性として創造されている。そして、ふたりのヒロインはおおまかに言えば作家から対等に扱われ描写されていると言えよう。事実、人間スタンダールの人生における恋愛体験は彼の小説の主人公のそれである。彼は人生経験豊かな女性からも愛されたし、社会に出たばかりの小娘からも愛されたのである。それゆえ、作家スタンダールはタイプの異なったふたりのヒロインを創造することができたのである。

作品に真実らしさが必要なのは劇作の専売特許のみならず小説にあっては同様なのである。ツクリモノそのものでは読者はいつも作家に厳しい警告を用意しているからである。すなわち、事実は小説よりも奇なりと。

さて、2,3年前からバルザックは彼と同じく文学界に野心を持つ連中と知

りあい交際していた。その時分に彼の友人となったあのル・プロトヴァンが、バルザックを群小新聞社に紹介していた。それらは、『商業』、『パイロット』、『海賊』、『びっこの悪魔』紙などである。これらの新聞には、パリで明日の成功を夢みる若い野心家たちがむらがっており、後年、バルザックは『幻滅』のなかでこれらの若者たちの群像を描写している。彼自身も仲間になった愉快的連中には、オラース・ナポレオン・レーソン、ピエール・ジョゼフ・ルソー、エチエンヌ・アラゴ、ル・プロトヴァンなどがいた。彼等が最も夢みたのは、劇作家になり、金持ちになることだった。そこで、バルザックも仲間の影響からか、ふたつのメロドラマを好い加減でかたづけていたが、勿論、どちらも上演されうる代物ではなかった。

次に彼が試みた仕事は詩を作ることであったが、それも独創的なものではなく、つまり、読者に迎合するために当時ようやく認められ始めた浪漫派の詩人であるシェニエやラマルチエヌの詩を真似ることであった。だが、バルザックが詩作をやってみて得た結論は、自分は詩人にはまったく不向きな作家だということだったし、それに、詩などというものは、退屈で嫌気のさす韻律学にすぎない代物に思えたのである。それで、結局、彼は小説の創作に戻ってゆくことになる。

翌年の1823年、バルザックはバルバ・エ・ユベールから『最後の妖精』を出版しているが、後年、この小説の刊行事情を次の如く回想している。

（ああ、私は『最後の妖精』が書物のなかの第一級のものであると信じた。そして、ある女が3年間も店でねむったままになった500部を私が印刷するのを助けてくれたのであった。）（K）

では、バルザックが傑作であると自ら信じたこの小説は、どのような作品なのか、われわれは例の如くその梗概を語ってみたい。この小説は、副題が意味している『千一夜物語』的な幻想を持ち、『アルデーヌの助任司祭』の主人公ジョゼフと同様、主人公アベルは、父の方針で孤島で育った自然児であり、このアベルにサマセット公爵夫人が愛を覚えることから物語が始まる。なぜな

ら、公爵夫人は地位にも富にも恵まれて社交界で暮らしていたが、やがて、そうした社交界のありかたに嫌悪を感じ始めていた。そんな時、公爵夫人は偶然アベルを知り、見るからに純真そのもので、まるで疑うことを知らない彼の性格を利用して、妖精になりすました。自己の邸にアベルを招待したときには、彼に地下道をたどらせ、さらにその地下道は千一夜ばりの仕掛さえ作らせておいた。そして、彼女は彼にあらゆる望みをかなえるという不思議なランプを持たせるのであるが、アベルが何かを望むとき、その望みをかなえさせるのは、ランプの魔法でなく、公爵夫人自身であった。けれども、アベルの夢がほどなく醒めるときがきて、彼は昔から彼を愛してくれた平民の娘と結婚する。以上がこの小説の梗概である。

われわれが先にみたバルザックの追憶に読まれるある女とは勿論ペルニー夫人そのひとである。そして、彼女はバルザックのためにサマセット公爵夫人の役割を演じたのであり、資金援助をするのはこの小説の件ばかりでなく、これから先も彼が企てる諸々の事業に物心両面から援助している。しかしながら、夫人のそうした援助資金は、いったん彼の手に移るとなぜか水泡に帰してしまう。バルザックは机上ではこの事業は儲けになると黒字を計上するけれども、実際に、彼が事業にとりかかり、しばらく営業してみると赤字ばかりが計上されることになる。つまり、バルザックはいつも机上の実業家でしかなかったのである。